

『南山神学』43号（2020年3月）pp. 189-209.

【研究ノート】

男女の違い ——人間の尊厳の視点から——

ヤコブ・ライチャーニ

はじめに

男女の違いとは何か。それは当たり前聞こえる問い、子供ですら直感的にその違いが分かる区別、幼稚とでも言うべき問題かもしれないが、ここ最近疑問視されるようになってきた。また、コメディアンや漫才師なら多くのネタにして聴衆を笑わせることができる分野でもあるが、政治家や学者がその関連で発言すると、差別やヘイトスピーチと非難されがちでもある。事実、夫婦間や恋愛関係においてだけではなく、日常生活で男性と女性との間に何らかの違いが存在し、それはしばしば勘違い、誤解、喧嘩や他のトラブルの原因にもなるし、他方ではその違いを豊かでありがたい多様性として楽しむことも、お互いの益のために活用することもできる。その前提になっているのは、男性であることや女性であることの根底には何かしらの土台があり、それは異性とは関連する部分もあれば根本的に異なる部分もあり、各人がそのどちらかの大きな領域に属さなければならない、という発想である。結果として現れるのは様々な男性像と女性像であっても、出発点はただ2つの生得的な可能性である¹。ところが、その違いを改めて科学的に捉えてみるやいなや、問題が多く発生することがある。つまり、漫才師ではなく、研究者がその違いについて考えると、固定観念に囚われている頑固者とレッテルを貼られ、場合によってはどちらかの性を抑圧し、あるいは、はっきりとした性別に属さない人をことごとく軽蔑し

¹ 注目すべきなのは、intersex conditionと呼ばれる医学的な疾病も、間違っただ反対の体で生まれたという意識を持つ人の「心の問題」を指しているtranssexualismもみな基本的に男性と女性という2項に言及しているということである。

ていると決め付けられる。言い換えれば、男女の違いは生物学的なものだけなのか、脳の違いもあるのか、主に考え方や感情の違いなのかを問い始めると、それに反抗して「根拠がない」「根拠が要らない」「根拠があってはならない」などと答える人がいるのである。その裏には様々な意図があるだろう。例えば、次のようなものである。

- ・男女を異なるものとして扱いたくないから、その違いを強調すべきではない
- ・男性像／女性像は全く社会的な構築物に過ぎないから、大した根拠はあり得ない
- ・根拠があってもなくても、男性であるかどうかは自分で決め、なりたい性になる

上記の意図のどちらか、あるいはその他であろうか。科学の世界では常に分からないことが多くあるが、あえて理由を探らないことは決して学問にふさわしい態度であるとは言えない。とにかく、調べても本当の原因が分からないかもしれないからといって、問うことをやめるとか、原因について問うことが許されないのはイデオロギー的な色彩を帯びた考えだとしか言いようがない。よって、本稿では改めて様々なアプローチを取る学者が男女の違いについて議論していることに注目を当てたい。それゆえ、更なる研究への序説として、主流の研究を紹介し、時事問題として取り上げられている情報を集めることを本稿の目的とする。

1 男女の違いについて問う歴史

心理的な発達の段階で、かつては性別というものは所属する最初のグループを指し、安堵感、安全やアイデンティティーの意識を与えてくれるものの一つと解釈されていた。自分は誰であるかという自己意識を持つ前に、周囲から何者であるかを暫定的に定義されることが普通である。まずは同性同士のグループで仲間を見つけ、同種の考え方を培い、居場所を見つけ、自分の自己同一性を固めてから、異性の存在とその違いに気づき、それを認め、全くの他者であ

る異性者と出会うことに挑戦することは本来普通であった。男女どちらの接し方も、理想的には二人の親から学び、家庭で経験することだが、今や兄弟も少ない時代だというだけでなく、片親だけの家族も多いことによって、そのプロセスと課題がもはやそれほど簡単でなくなっている。とにかく、内側と外側の区別と、どこか似た者同士のグループに帰属する意志と欲求は人間にとって普遍的な態度なのかもしれない。ただ、男女に別れることは出発点であり、大まかな大別であり、中のメンバーの具体的な在り方を細部まで指定するわけでもなければ、外にいるメンバーを全く除外するということを含意するわけでもない。むしろ、第一のステップとして、グループ内の他のメンバーから自分の在り方を学び、刺激され、チャレンジを受けることなど様々な利益がある。パターンを学んでからそれを修正していくというのは人間の教育と発達の固有性なのではないだろうか。

ただ、正しい区別と行き過ぎた区別との境界線は非常に曖昧なように思われる。1992年にJ. グレーが公刊した『男性は火星から、女性は木星からやってきた』という本が一時期有名になり、多くの批判を浴びた²。夫婦のカウンセリングという心理学的視点から書かれているので、その実際の現場ではお互いの違いを意識することが喧嘩の有効な解決法であっても、それにはそこまでの構造上の違いがない、というように実際の理論（実践）と本質的で学問的な理論を分ける人が現れたのである。似たようなことは女性解放運動（フェミニズム）の一つの流れであるdifference feminismについても言える³。それは（男性と同等な存在である）女性の尊厳を強調するために、本質的な価値だけではなく、女性の完全な独立、男性との相互補完性どころか、あえて男性との根本

² ジョン・グレイ『ベスト・パートナーになるために——男は火星から、女は金星からやってきた——』（知的生きかた文庫）、三笠書房、2001年。

³ フェミニズムは男女（正確に言えば全ての人間的な命）の同等性を謳っているはずであって、同一性を強調しているなら誤解である。それにもかかわらず、実は様々な種類のフェミニズムがあると言っても過言ではない。男性と比較して女性の平等、同能力を掲げるか、あえて女性の特徴、女性にしかない能力を掲げるか、異性への言及をやめて性別によらず全ての人間の権利を掲げるか、全ての人間をカテゴリーにはまらないただの個人として扱うか、様々である。違いを強調し過ぎるのも正しくないのだが、無視することも良くないだろう。

的な違い、究極の場合には男性が本質的に不要であることを唱えた。例えば、かのコールバーグの弟子である心理学者C. ギリガンは、女性には男性と異なる道徳的な論理思考があり、「正義」ではなく「ケア」が得意であり、ジレンマに直面した際に男性と逆の解決法に至ると主張した⁴。つまり、どちらがより良いと言わなくても、男性に足りないものを女性が持ち合わせており、互いに補っているのである⁵。しかし、女性には正義感がなく男性にはケアができないとまで言うてしまうなら、それもまた一方的な単純過ぎる説であると批判されることになった。なぜなら、あたかも二者択一かのように女性の特徴を強調しようとしたからである。歴史の中で度々繰り返されたように、ある極端な面を強調することはいとも簡単であるが、異なる側面をバランスよく結び合わせることは一番難しい課題なのである。しかし、本当の問題は次のことである。一つの性別の素晴らしさを（正しく）取り上げるべく、きっぱり男女を分けることは、その反対の説をすぐ招くことになる。最近特に社会科学系に強い傾向にあるこの見解によれば、男女には大した違いはなく、見た目上の違いや生殖器の形の違い以外に本質的な、注目に値するような違いはない。そして、男であるか女であるか（また、その他であるか）は行動などに何の影響も与えない。自分の性別は先に与えられたり、あるいは一回限り与えられたりするのではなく、振る舞いによって決め、全く一から作り上げていくもの、場合によって作り直すことも可能なものだという。しかし、男性と女性の両者の違いを強調することによって優劣や差別と結びつけることも、それを避けるために両者の違いを無視することも、もしその違いが生物学的な根拠を持つならば、不完全で正しくない態度に思える。

⁴ キャロル・ギリガン著；生田久美子、並木美智子共訳『もうひとつの声——男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ——』川島書店、1986年。

⁵ これは、実は、紀元前4世紀のプラトンの愛と性別の魅力の由来に関する説であった。それによれば、男性と女性はもともと同じ一つの生き物であったが、その後真つ二つに切り分けられたから、相手にないものを持ち、自分にもないものを相手に求めるのである（*Symposium*, 189c-193eを参照）。面白いことに、聖書の創世記物語も神の像として造られた人間について述べる時に、あたかも一人の人間であったかのように、男女を三人称単数形で呼んでいる。

2 違いがあるとすれば、何によるか？

生まれたばかりの時から限りなく100%に近く何らかの違いがはっきりと見られ、ほとんどの人が終生どちらかの性別の特徴をより多く示し、どちらかの性別とはより異なる特徴が見られる。しかし、その違いはどこまで本質的なもので、意義を持つものなのであろうか。大きく分ければ、生物学的、すなわち進化論および遺伝学的な説明と社会学的な説明ができる。前者は進化論による二形態論の原因を解明し、後者は社会的な組織の機能と影響を主張し批判する。つまり、種としてのヒトの由来を説明する時に進化論に言及したり、性別を問う時に進化論を度外視したりするならば、それには一貫性がない。しかし、そのような現象も見られなくはない。これを欧米の世界で知らしめたのはノルウェイの番組で、2010年に国立放送局で上映された『洗脳』(Hjernevask)という番組であった。その第1話はいわゆるgender equality paradoxのテーマを扱ったもので、性別間の生物学的な違いの根拠の有無を問うていた⁶。以下でもこの番組に言及するが、それが示したのはまず男女の能力の差でもその有無でもなく、男女の興味の違いであった。一番分かりやすい事例は、男性と女性とでばらつきがある職業選択である。しばらく唱えられていた説によると、男女が共に平等かつ自由に生きられる社会になればなるほど、興味の対象や趣味、行動、職業も、男女比が限りなく50/50の割合に近づくはずである。なぜなら、性差はただ生殖にとって意味をなしているからである。ところが、北欧のような地域では女性の権利など何十年間も盛んに掲げられてきたし、両方の性の社会進出が進み、性別による差別は非常に低いにも関わらず、看護師やエンジニアといった極端に女性らしい／男性らしい仕事は相変わらず一つの性別だけが圧倒的に多い。これは世界的な現象であり、様々な文化に横断的に見られる一種の矛盾であり、謎である。唯一例外的なのは、社会が強制的に操られたり、経済的な困窮という必要性によって職業を強いられ

⁶ 英語の字幕のある動画は次のサイトで閲覧できる。 <https://youtu.be/m3tiDr4E4LM> (accessed 16 February 2020).

たりする場合だけ、エンジニアなどを女性でもやりたがる国がある⁷。ところが、どの職種にも女性が半分になるまで休まないと主張したり、男性が看護師になろうとしないのはいまだに残る社会的な期待と抑圧による結果だと主張したりする学者も相変わらずいるし、特に例の北欧では顕著である。平等になる理想を持つことはとても良いことだけれども、強制的に人々にしたくない仕事をさせることが目的であるならば要注意である。この番組ではバランスよく両側の意見が紹介されているが、最終的に、一時期政府などからも大きな補助金を受けていた社会科学系のジェンダー・スタディーズなどの何人かの研究者は非常に疑問視されてしまう結論をもたらした。以下にも触れるが、性別には進化論的、生物学的な根拠があり、それは言うまでもなく心理などにも現れ、その結果例外があっても人間の場合には性別は2種類だけである、と論理的に説明する様々な著名な学者（ノルウェイ、イギリス、アメリカ）が紹介されている。関連があるかどうかは分からないが、番組放送の1年後に上記のジェンダー・スタディーズ研究所の政府補助金が終わり、結局閉鎖されることになった事実も興味深い。

これまで見てきたように、近年の研究では弁証法的な関係を簡潔に表す傾向が強く、単純化する恐れがある。例えば、男性としての特徴と女性としてのそれをきっぱり切り離して、あたかも関係ないものであるかのように考えることもできる。また、男性であるか、男性になるかが最初からことごとくDNAに刻まれているか、あるいは逆に遺伝的な遺産や究極の場合には教育や環境による影響も意義を持たず、何になるかは自分で決め、作り上げていくものだと主張されることも多々ある。この後者の傾向は特に実存主義的な色彩を帯びている思想に多いのだが、どの性別になるかが与えられるだけのものではなく、自分で果たすべき課題でもあるということをおある意味で正しく強調している部分もある。しかし、それらを白黒に考えるならば、いつも問題が生じる。そこ

⁷ 調査 “The Relevance of Science Education” , <https://roseproject.no/network/countries/norway/eng/nor-Sjoberg-Schreiner-overview-2010.pdf> (accessed 20 October 2019) を参照。確かに、欧米諸国においてSTEMと呼ばれる科学・技術・工学・数学という学問には確かに女性が半分に遠く及ばないが、だからと言って差別の結果だとは限らない。

で、男性が持たないものを女性が持ち、男性にできないことが女性にできると考えたギリガンと異なり、男性的なものと女性的なものがむしろ混ざっていると考えたC. G. ユングに触れておこう。彼の精神分析によれば、人間には2種類の性質があり、女性的なものをanimaと名付け、男性的なものをanimusと呼んだわけだが、どの人間にも両方があり、自分の性別と反対の要素をも抑えずにうまく生かさないと問題に至ってしまう可能性があるという⁸。この場合、両方の要素を同じぐらいに本来的なものとして、またどちらも全ての人にとって欠かせないものとして考え、いわば二元論的な余韻を残している。しかし、確かにその示唆を受けて言えるのは、全く女性的なanimaを欠いている男性のことを「男らしい」（紳士）ではなく、むしろ「男臭い」（野蛮な）人間だと指すことができる。近年、そのような男性性の一部を有害なものとして非難し、抑えようとする動きがあるが、気をつけないと単純で破壊的な男性らしさだけでなく、本質的で調和のとれた男性性も同時に捨て去られてしまう。また、animusとanimaが同等なものであるならば、女性についても似たことが言えるのではないだろうか⁹。

⁸ その影響を受けてか、もう一人の精神分析家のE. フロムも「父親的な愛」と「母親的な愛」について語るが、母性的な愛を具現しているのはだいたい女性であるが、男性にとっても大事な側面である。簡単に言うならば、一つは認め、守る愛であるのに対して、もう一つは要求し成長を促す愛である。行動の中で恒常性か自発性かにおいてどちらかの性別がより優れているが、その反対の面を全く除いてしまうと、恒常性は静止となり、自発性は混沌となってしまう。ところで、気持ちの上ではより母性的な愛が強い（生物学的な）男性がいるかもしれないが、その人をこれだけのために女性と呼ぶことができるかどうかが問題である。Cf. E. FROMM, *The Art of Loving*, Harper & Row, New York 1956, 41f.

⁹ ここで更にR. グアルディーニによる「対極」（Gegensatz）と「対立項」（Widerspruch）の区別を引き合いに出すことが有益かもしれない。彼は直接それを男女の文脈において使っているわけではないが、ある意味で男性であることと女性であることはお互いを否定し、相反しているのではなく、また、純粋な形での男と女があるわけではなく、どちらかがより強調されながらも、常にある程度まで反対の対極をも含んでいる、と言えよう。この二つは切り離されずして混ざることなく、浸透し合っているのではないだろうか。例えば、直感的な能力は女性においてほぼ完全に見出されるというものの、概念的思考を取り除いた、純粋な形での直感はあると得ない（cfr. R. GUARDINI, *Der Gegensatz*, Matthias-Grünwald: Mainz, 1998⁴, 148）。

3 性別間の相違の具体的な現れ

一目瞭然の身体的な違いや遺伝子の違いの他に、男女の違いはいつでも見られるのか見てみよう。そもそも体の構造と形の違いも特定の性ホルモンの分泌によるものであるし、それをさらに司るのは脳であるため、脳そのものにも性別による特徴や違いがあるのではないか。また、性ホルモンだといえども、ただ生殖細胞を作ることを導くだけではない。古くは、アリストテレスなどに依拠する不完全な生命観のため、女性は完成していない男性に過ぎないと考えられていた時代もあった。つまり、構造上同じ生物ではあるが、女性にはある種の欠落があるという考えである¹⁰。しかし、今の知識では、いわゆる入魂の時期（言い換えれば発達過程）は性別によって何ら変わらないことが分かる。同様に、精子が新しい命の全ての力（言い換えれば遺伝的な情報）を持ち、女性がただそれを受けるのではない、ということも科学の発展によって明らかになった。ただし、不思議なことに、アリストテレスの見解と似た点として男性も女性も同じ出発点であることも分かった。しかも、受精卵のデフォルトの設定では、むしろ女性になるのである。つまり、7週目ぐらいまで染色体による性別以外に何ら生殖腺あるいは表現型上の性別はまだ見られず、ヒト胚には仮説上どちらの性別になる可能性もあると考えられ、Y染色体のいわゆる「SRY部分」の働きによってテストステロンの分泌が始まらない限り、胚はそのまま女性になっていくようである。つまり、不完全な男性としての女性どころか、全ての人はずっと女性になる可能性があったのであるから、女性にならなかったのが男性であるのだ、とも言えよう。かなり稀ではあるが、母体のテストステロンの分泌異変のためその過程がうまくいかないケースもあり、遺伝的に設定されている性別と実際に成長した（正しくは、途中まで発達した）性別が違ふという葛藤に悩むケースも見られる。しかしながら、どちらになるかは偶

¹⁰ トマス・アクィナスもこの間違ったアリストテレス的な生命観を受け継いでいるが、しかし、すぐその後に男女とも神の像であり、同等な尊厳を帯びていることを強調するのを忘れない。考えてみれば、女性も女性なりに理性的であるし、女性なしの男性もそれなりに不完全である。*Summa Theologiae*, I, q. 92 a. 1 ad 1, q. 93 a. 4 ad 1を参照。

然でも、どちらでも良いのでも、両方とも結局同じであるのでもない。

このように、性別は人にとって大事な側面であるから、不確かな時にその根拠を知ることこそ個人の本当の、本来の性別を見分けることにも役立つ。間違い、あるいは恣意的な決断によって子供の性別を変えた、もしくは、正しく見極められなかったケースもまた存在している¹¹。そのような人に「性別は大事ではない」「皆平等な人間だ」とか「なりたい性別になれば良い」とだけ言うのは決して親切だとは言い難い。フェミニズムの発展に貢献したS.ド・ボーヴォワールの言う「女として生まれるのではなく、女性になっていくのだ」ということに何らかの真理があったとしても、常に注意が必要である。まず、女性についても言えることだが、男性にとってさらに重要な課題である。それから、なりたいものになれることはいかにも近代的な自由の理論であり、より伝統的でバランスのとれた思想に立つならば、そうなる傾向があるところのものにしかねない。すなわち、遺伝子も周りの影響も全てではなく、生まれ持った可能性を社会の教育や環境の影響、それから自分の決意に基づき努力によっていささか抑えたり、強めたりすることしかできない。見た目や気持ちは変えられたとしても、性別は根本的に取り消すことはできない。

そこで、近年一番議論されているのは、やはり、「脳」の構造と機能、それから個々人の違いである。長い間、女性を除外し差別するためではなく、むしろ無意識のうちに男女の体のほとんどと同じように脳もまた全く似ていると信じられ、思い込まれていたからこそ、実験には概ね男性の被験者しか使われていなかったことは事実である。その後、女性の特別性に気づき、脳をはじめとする様々なプロセスの違いを直感的ではなく実証的に取り上げ始めた人もいれば、そのような違いを強調することはsexismにつながるためか、男女の違いをあえて力強く否定する人も現れた。しかし、軽く調べてみるだけでも、多くのメディアなどではほとんど唯一の名前が登場し、引用されている。それは

¹¹ 歴史的に一番最初に広く知られたのはJohn Money医師の実験であり、理論上早い段階で生まれつきの性別を変えても、異なる性として問題なく育てていけるはずだった子供が、大失敗に終わった。1965年のケースではあるが、その後も今に至るまで似たケースが発生している。その最初の事例を紹介している次の著作を参照。ジョン・コラビント著；村井智之訳『ブレンダと呼ばれた少年』無名舎、2000年。

Gina RIPPONという脳科学者（心理学者？）とその研究結果である。彼女は生物学的な身体構造に根を下ろす性別間の違いを「神話」と呼び、それを今や制覇しているという意識を持っている。たとえ、脳の違いが見られたとしても、それは環境による影響の結果であるし、脳だけではなくあらゆる臓器にも違いが見られるはずである。決して変えられない違いではなく、社会からの刺激によって性別のあり方も脳の構造も形作られていくという。しかし、反対の考え方の研究者も決していないわけではない¹²。したがって、メディアの倫理や研究倫理の大きな訓練の場ともなるのではなからうか。一人の研究者の意見や、イデオロギー的な背景のある研究者の意見を自分の好みに合わせて繰り返し使い回していくよりは、逆の立場の研究者の意見も合わせて視野に入れ、比較しないわけにはいかないのである。では、心理学者や脳科学者の見解の具体的な例をいくつか挙げてみよう。多くの場合には明示的には言わないまでも、様々な分野の研究者が少なくとも暗示的に男女の脳などの違いを示唆している。以下のいくつかの代表的な見解は挙げるに値する。

(1) 些細な違いではあるが、男女の違いが現れるのは例えば色の認識の仕方においてである。なぜなら、眼球の網膜の細胞の種類とその配分が異なるからである。多くの女性は細かい色の濃淡や似ても似つかぬ色の種類の区別をすることが得意であるが、男女の目の機能の違いはそれ以外の結果ももたらしている。それは、男性は速く動く対象を目で追い、空間の奥か手前かをより正確に見分ける能力が優れているのに対し、女性は細部まで細かいニュアンスに気づくことが得意だということである。言うまでもなく、この現象は進化論的に説明され得る。

¹² G. RIPPONの著書“The Gendered Brain”の書評を書いているLarry CAHILLを参照。
<https://quillette.com/2019/03/29/denying-the-neuroscience-of-sex-differences/> (accessed 11 January 2020)。逆に脳の性別間の違いを認め、調べようとしている多くの学者に言わせるなら、例えば脳の左半球と右半球、または前後のつながりの密接さ、シナプスの多さで男性と女性が異なることが分かる。以下の文献を参照。L. サックス著；谷川漣訳『男の子の脳、女の子の脳——こんなにちがう見え方、聞こえ方、学び方——』草思社、2006；L. プリゼンディーン著；吉田利子訳『女は人生で三度、生まれ変わる——脳の変化でみる女の一生——』草思社、2008；S. ルベイ著；新井康允訳『脳が決める男と女——性の起源とジェンダー・アイデンティティ——』文光堂、2000年。

(2) 上記のノルウェイの番組でも紹介されたのだが、イギリス人の学者 S. BARRON-COHENの新生児に関する研究が極めて重要である。彼の第一の目的は自閉症の研究なのだが、新生児の性別によって行動パターンも異なるという現象に気づき、注目してきた。一言で言うならば、男子として生まれる子供は顔を見つめる時間がやや短く、アイコンタクトを避ける傾向があり、おもちゃを選ぶ際に形が複雑なもの、分解したり組み合わせたりすることができるものに興味を示す。その傾向が極端に強い状況が自閉症の症状に酷似しており、自閉症の子供には男児が圧倒的な割合を占めているのも偶然ではなかろう。それに対して、女の子がどの色が好きかは社会的な決めつけであったとしても、女の子は概して触感の快いもの、顔のあるものをおもちゃとして優先し、母親の顔を見つめる時間が生まれてすぐから比較的長いというデータがある。また、霊長類や類人猿を研究し、動物の行動と情緒を分析するF. de WAALのような研究者も度々人間だけではなく哺乳類をはじめとする数々の動物において、女性のほうが感情移入に長けて、相手の痛みに共感し、連動で泣き始めるのは多くの場合女の子であることを指摘している。

(3) もう一つの分野は道徳的なジレンマの解決を考える時のパターンである。かつて、ギリガンも極端に女性の道徳感の違いを（あまりにも？）強調していたのだが、最近では例えばD. EDMONDS¹³に言わせれば、いわゆる「トロッコのジレンマ」について思考実験を行ってみたところ、男性と女性の答えが顕著に異なっていた。平均的に、男性はより功利主義的であり、プラグマティックであるのに対して、女性は先ほども述べたように感情移入が得意で、全体の効果よりも苦しんでいる他人を一人ひとり思いやる傾向が見られる。特定の人を助けるべきか、あるいは、ただ苦しむ人の総数を減らすべきかという問いの他に、とりわけ第三者を巻き込んで犠牲にしても良いかどうかという点においてより多くの女性が疑問を抱き、慈しみに動かされているためか、結論よりも結論に至る手段を気にしているようである。

¹³ D. EDMONDS, *Would You Kill the Fat Man? The Trolley Problem and What Your Answer Tells Us About Right and Wrong*, Princeton University Press, 2014, 123.

(4) また、最先端の脳科学の第一人者であるM. GAZZANIGAの指摘も興味深い¹⁴。認知科学的に見ても、認識の仕組みで男女は明らかに異なる。つまり、女性よりも男性のほうがはるかに自分の得た観念にしがみつくと特徴があり、思い込む傾向があり、意見を手放したり変えたりすること (letting go) に苦労をする。そのせいか、自然科学者には圧倒的に男性が多く、しかも頑固な自然科学者の多くはまた男性である。そのような学者の思い込みは他ならぬ盲目的な信仰に近いと言っても過言ではない¹⁵。一度正しいと確信したら男性はその立場を誰にも譲らず、反対の証拠があるにも関わらず妥協しないように出来ているようである。それと関連して、ただ一つのアイディアに没頭することが男性の特徴であるならば、女性は逆に同時に複数の活動に携わること (multi-tasking) ができる、と半分冗談で言われることもある。

(5) 熱い議論を引き起こし、また、驚くべきことに脅迫まで招いてしまったのは心理学者のS. PINKERの著作であった。彼は男性と女性が根本的に異なる領域を全部で6つ挙げている¹⁶。ただし、言うておかなければならないのは、その違いは「平均的に」見られるものであるということが重要で、また、矛盾に聞こえるかもしれないが、ほとんどの男性とほとんどの女性は似ており、性別間の全体的な違いよりも、性別内の多様性のほうが大きいことが多い、ということである。ところが、極端なケースにおいては、その割合が急に変わり、男女の異なる特徴が顕著になってくる、ということを彼は強調している。その6つの側面は以下の通りである。

¹⁴ M. GAZZANIGA, *The Ethical Brain. The Science of Our Moral Dilemmas*, Harper Perennial, 2005, 146-147.

¹⁵ 疑問1: 宗教に入りやすく、信者の大半を占めているのは女性であるのだが、なぜであろう。おそらく、真理について確固たる確信を持つというよりも、神秘を体験し情緒的に満足することと関係があるのではないかと思われる。また、神との個人的な関係を楽しむだけではなく、信者同士の対人関係を味わうことを求めているからなのではないか。

¹⁶ その代表的な著作は『空白の石版』 (orig. 2002) である。邦訳は『人間の本性を考える——心は「空白の石版」か——』 (2004)。ピンカーとそのハーバードの同僚 Elisabeth SPELKEとの討論の資料は次のホームページで閲覧できる。 https://www.edge.org/3rd_culture/debate05/debate05_index.html (accessed 10 January 2020).

- 人生の価値や選択の優先順位 (life priorities): 進路を決めるにあたり、男性は家族生活などを犠牲にしてまで、キャリアを選びがちであるのに対して、女性にとっては仕事が全てではないから、パートタイムを選択したり給料の安い仕事で満足したりすることもある。もちろん、仕事も人間関係も大事であるが、ここではそのどちらかを選ばざるを得ない場合を想定している。多くの男性は仕事に自己の価値を見出し、そのような献身を求める企業はやはり男性を選ぼうとする¹⁷。
- 人に興味があるか、ものに興味があるか (people vs. things): 職業の選択にもつながるが、女性は人を対象にする活動に興味があるから、医師、心理士、教師、福祉士などになることを選ぶ傾向があるものの、男性は一般的に物理的なもの・仕組み・システム・機械により大きく興味を示し、そのような活動を目指す。それからチームで働く傾向と単独で働く傾向にも分かれるし、ライバル意識の有無やコミュニケーション能力の有無も同時に問われる。
- リスクを冒す覚悟や頻度 (risk taking): 危険が伴う仕事は圧倒的に男性が多くする（させられる？）ことは言うまでもない。例えば、兵士や高層ビルで働く技師、宇宙飛行士など、そのリスクに男性はある種の魅力を感じている、あるいはそれほど命を惜しまないかもしれない。加えて、「より理性的で論理的だ」という偏った言い方をすることも多いのだが、逆に不条理な行動を取るのも男性が多い。例えば、いわゆるアドレナリンスポーツとか、競争するあまりに自分の命を危険にさらす行為など、男性が占める割合が極めて大きい。
- ある物理的な対象を想像し、それを頭の中で回転させるという能力 (3D mental transformation): 空間での動き方、地図の読み方、方向性の感じ方とも関係があるが、幾何学的なものを抽象的に扱うことは、男性のほう

¹⁷ 近年批判されているgender wage gapの原因の一つもそこにある。もっぱら女性を差別し、同じ仕事でより低い時給で済ませるというだけではなく、女性が選ぶとしない仕事を男性がより高い報酬でしたり、あるいは家族を疎かにして長時間にわたって終わらせないといけない仕事を男性がしたりすることで、ある意味で当然、給料の差が生まれるのではない。

がより成功する。すなわち、回転させた同じものの2つの側面を見せられ、比較させられると、それを同じものであるか否かを判断する力がより男性にあるということである。

- 数学的な論述の仕方 (mathematical reasoning): 様々な数学的な問題を解決することでも男女の違いが見られるが、ただ上手下手ではない。脳の大きさの違いにもかかわらず、平均のIQは変わらないのが面白い。ただし、女性はやり方を覚え、決まった計算の仕方ですぐ難しい問題をより早く正確に解くことができるのに対して、男子学生は言葉で設問されている問題を想像しながら理解し、解決法を見つけることが得意なようである。しかし、他方で言葉のニュアンスを読み取ったり、言語能力が早く発達したりするのは女性の特徴であり、なぜ男性が言葉での設問を解くことが得意かということが疑問として残る¹⁸。だいたい言語の発達の時期も遅く、吃音などといった言語障害も男性により多く見られるわけだが、能力としての言語そのものではなく、想像力の問題なのではないだろうか。知識を適用することと新たな解決法を見出すこととの違いであるかもしれない。
- 変異性 (variability): これまで平均的な男性と平均的な女性の比較をし、その違いについて挙げていたが、それはつまりだいたいの男性は物体を三次元的に考えたりすることができ、だいたいの女性は人の気持ちを重視し、それを顔の表現や言葉遣いから微妙なニュアンスまで読み取ることによって優れているということであった。ところが、例えば犯罪率を見ても分かるように、一般的に男性も女性も同じように犯罪を犯し、刑務所に入っている人の割合も大した性別の差は見られないにも関わらず、極端な暴力的な悪事に焦点を当ててみると、突然性別で別れることに気づ

¹⁸ 疑問2: 言語障害、自閉症の割合の多さだけではなく、母語の習得も発達的に遅いのが男性であるならば、なぜ言葉で設問されている数学的な問題を解くことにおいてより優れているだろうか。おそらく、速さではなく、時間をかけてじっくり論じることができることと関係があるのではないか。他方で、その前提としては意味のある問題、重要だと思える問題であることであり、そうでない問題の場合には男性のほうがより簡単に飽きてしまう感が否めない。

く。女性も凶悪な殺人は犯すものの、圧倒的に男性の割合が大きい¹⁹。同様に、男性にも女性にも似たような科学の能力があり、成績が同じぐらい良かったり悪かったりする（場合によっては、女子生徒の理科の成績がより優れていることもある）が、最先端の研究や技術の開発では急に男性が大半を占めるという現象が見られる。もちろん、それは人生観、価値観、家族観とも関係をしていて、専門的な研究者であればあるほど様々なもの（対人関係、家族、趣味に当てる時間など）を犠牲にする必要があるということでも説明され得る。そのような研究も、女性にはできないというよりも、女性たちは自由な選択により、そのような仕事をしながらないということに他ならない。

(6) 上記のノルウェイの番組で紹介されていたイギリスの女性研究者も興味深い点を指摘している。ある研究によると、難しい決断をしなければいけない時や非常に苦しい経験を控えている時に、誰と一緒に過ごして、何をしたいかと聞かれると、男性は沈黙し、一人で考え込むことを選び、女性は誰かの存在を感じ、誰かと気持ちを分かち合いたがるようである。自分の悩みについて、あるいは、喧嘩の原因について話したくない男性と解決に至らなくても、何度も何度も話したい女性とのこのギャップに夫婦の問題の多くが見られるのではないだろうか。

(7) 脳の働きの研究とともに、愛の実態、愛の本質、愛の解剖学とも言うべきものも調べられている。体内に分泌される様々な物質（とりわけ簡単すぎる用語でしばしば愛のホルモンと呼ばれているオキシトシン）の働きでも、男性と女性は異なっている²⁰。愛は、あるかないかの気持ちだけではないから、それには段階があり、それ自体がプロセスである。しかし、男性は、女性とは違って愛の理解が異なったり、次の段階に進むペースが遅かったり、セクシュ

¹⁹ 一時期、supermaleという説が流行していた。それは、遺伝的な異変によってY染色体を余分にもつ男性の状態を言うが、それが凶悪な犯人の間に多いのではないかと、暴力はY染色体に書き込まれているのではないかと考えられたが、今は誤りであったとされている。

²⁰ ヘレン・E・フィッシャー著；吉田利子訳『愛はなぜ終わるのか——結婚・不倫・離婚の自然史——』草思社、1993年を参照。

アリティの考え方、感じ方がより肉体的かつ生殖器中心のだったり、一時的なものだったりすることが多い。なぜなら、絆を深めようとするオキシトシンの効果をテストステロンが邪魔しているからである。また、アルコールの効果としてオキシトシンの受容体が一時的に機能しなくなることや、性行為の直後にもう一つの重要なホルモンであるヴァゾプレシンが男性の場合は激減することも大きな意味を持つと指摘されている。他方で、性ホルモンをはじめとする、脳などで分泌される化学物質の割合や働きの違いさえ分かれば、女性は感情的であり男性は理性的であるという単純過ぎる区別も免れる。唯一の真のステレオタイプと呼んでも良いかもしれないこの区別を詳しく見ると、男性はテストステロンのために女性よりも感情的であり抑え切れない怒りと暴力へと走る傾向があることが分かる。一概に社会が作り上げ、推進している男性像だとは言えないのである。それから、女性は男性よりも結果について考察し、感情を抑え、一番望ましい解決についてじっくり、かつ冷静に論じることができることも安易に想像できる。

以上のことから、男女の違いはいくつかの例に過ぎず、人間のあり方やその多様性は「自然か環境か」あるいは「本性か教育か」という大きな枠組みの中で考えることができる。時代ごとにどちらか極端な面を強調し過ぎる風潮があり、次の時代にはまたその対極を過剰に提唱する傾向がある。バランスのとれた立場に立つことは極めて難しいようである。現代人の考え方は「平等」の概念に促されていて、それ自体は素晴らしい歴史的な発展の結果ではあるが、自然にも平等がなければならず、被造物の間には如何なる区別もあってはならず、もし違いが見られる自然状態があればそれを否定すべき、あるいは、是正すべきだという概念は多くの疑問を引き起こす²¹。人間は自然に依拠しながらも、野生の状態を超えているので、生物の世界において違いが存在していても

²¹ 生き物の中に、非性的な方法で生殖するものも両性具有者も存在することも真実であるが、人間にとってはその事実は何の意味ももたない。進化論の解釈にもよるが、その進化が人間にとって最も合理的な過程であり、今の状態が存続するために最も有益で、偶然でも可逆的でもない発展であったと考えると、人間の性別二形態性を疑ったり変えようとしたりする理由はない。

問題ない。そのため、たとえ女性と男性が根本的に異なっていたとしても、その事実自体は優劣について何ら述べてはいない。構造上の違いがあっても、尊厳の差が必ずしもそこから帰結されるとは限らない。むしろ、違うからこそ、誤解や喧嘩の原因になるだけではなく、相互補完という形によってお互いを必要としたり、同じ種の異なる他者だからこそコミュニケーション（交流、対話）も可能になったりするとさえ言えよう。

4 結論と更なる課題

男女の共通性と差異を調べることによって、生物学を超えた様々な結論を得ることができる。まず、学問領域間の対話や協力について考えさせられる。女性のあり方や男性との違いについて学問的に論じていても、それは社会的あるいは政治的に解釈されることがある。しかし、知識や情報を差別的に悪用されることを防止するためにその知識自体を否定する必要はなく、差別と戦うことで十分なはずである。それに、例えば男性が「どうであるか」はそのまま（すべての男性が）「どうであるべきか」という結論に直結しないことが大事である²²。科学的なデータとその解釈は別々のものなのである。それにもかかわらず、それぞれの性別のルーツや土台を問うこと自体を許さないという考え方も見られ、非科学的というよりも宗教的な色彩を帯びているとすら見受けられる。男女の違いに興味がない、あるいは明示的にそれを拒否する立場の人には主に次の動機が考えられる。前述したように「感情的—論理的」などのどちらかの違いを強調し過ぎて「より良い」と評価を加え差別的な扱いに導くことを恐れ、根元から男女の区別を廃止したいという思いがその一つである。しかし、感情的であることも論理的であることも、どちらかの性においてより強い特徴だったとしても、一概に良い性質か悪い性質かは言えない。あるいは、個

²² 同じことは動物との比較についても言える。人間が進化論的にどう出来上がっているかによらず、次の主張が非常に大切である。まず、事実として女性は共感への性向が男性より強いというものの、男性に共感の可能性がないわけではない。また、子孫を残すべく男性は確かに性的乱交に傾きやすいのだが、その遺伝的な構造によって自分のふしだらな行動を正当化できるというわけではない。

人差を心につけ、男女という大きな枠組みの中にある多様性を度外視したくないだとか、または、この二つのカテゴリーに当てはまらない人の気持ちを重視し、新たなカテゴリーを作る代わりに元々の分け方を否定するという願望もある。それに対して言えるのは、人生のあらゆる分野において例外というものもあり、それによって原則が変わることはないということ、しかも、もっと重要なのは人の気持ちを傷つけてしまうという理由だけで本来の概念を見直し、脱構築化するという発想には危ない側面が潜んでいるということである。とにかく、根本的な次元であるセクシュアリティが大事だとはいえ、その生まれつきの性別に違和感があったりして、その性別がたとえ間違っていると自覚していたとしても、性は人間の唯一のアイデンティティではないことを改めて強調しておきたい。

繰り返しとなるが、様々な学者が示した諸々の相違点から分かるのは、男性と女性の違いはこのグループを大きく、遠くから見つめて比較した時に分かる性差であり、想像上の平均的な男性と平均的な女性の相違を示しているに他ならない、ということである。それに、違いが色々あっても、共通点と類似点のほうがはるかに多いということも明らかである。同じ生き物である以上、能力の違いがあっても、尊厳においては同等であるし、同じことができるから同じ仕事に着く権利があるというだけではなく、違うことができるからこそ協力し合うべきでもある²³。また、もう一つの点は、それぞれの性別の中に確かに幅があり、個人と個人を比べたレベルでは、ある特徴においては異性に似ている人もいることが分かる。見た目あるいは趣味など、より女性に似た男性もいるが、それによってその人の男性性自体を疑う必要があるだろうか。同じ男性の間にも多様性があるからと言って、性別はカテゴリーではなくスペクトラムであると主張することはあまりにも短絡的に思える。なぜなら、どちらかの特徴や能

²³ 女性にしかできないことを女性に期待することは強制ではなく、自然な秩序である。例えば、女性たちだけに課されることであっても、妊娠の負担を負うことは、男性たちが戦争の場合に徴兵され国を守ることと同じぐらいに、英雄的な行為であり、褒め称えられるだけではなく、何らかの形で支え償うに値する行為である。しかも、フェミニスト哲学者の中にもそう考える人がいる。男女ともにできることを一つの性別だけに強いるならばそれは良くない。

力を比べるのではなく、特徴の合計からして限りなく100%に近い人々がどちらかの性に分けられるからである。そうでないと、例えば「同性愛者は男性の体に閉じ込められている女性だ」「数学が好きな女性は実は男性だ」という中世の間違いを再び犯すことになりかねない。自分の性別に納得いかない、それを受け止められない、他のメンバーと違うなどということは、必ずしも反対の性別に属しているということにはならない。本当の男性と呼べる人はすべての男性と全く似ているわけではないのである。

それから、進化論的に様々な現象をある程度まで解明することができる。つまり、今の諸々の現象には間違いなく遺伝的な影響があり、女性はどうかであるか、男性はどのように成長するかが何十万年の歴史を経て、ゲノムに書き記された情報に従って実現される。しかし、そのゲノムは周りの状況による刺激によって選抜され積み重ねられた情報でもあるので、いつまでも完成されない。そこから2つの疑問が浮かぶ。まず、元々の人間の純粋な状態、素の人間像に再び辿り着くことはできないのではないかということである。もう一つの疑問は、この途上にある進化論のプロセスに意図的に手を加え、それを変えることができる（可能という意味ではなく、許されるという意味で）かどうかである。それに対する考え方は分かれるだろうが、今までこのようになってきた男性と女性が辿った道はただの偶然でも失敗でもなく、何か論理的な道程だったと考える人ならば、ゲノムから読み取るべき部分と社会の影響に任されている部分とを懸命に識別しようとするだろう。自然本性と環境の影響は似た者同士でもライバルでもなく、協力できるパートナーになるほうがより効率的である。子供の教育に接して、自分の期待を押し付けないように全くステレオタイプなしに子供を育てることができるかどうかについても疑問が残る²⁴。各個人はどちらかの性別になる傾向があり、それを支える、チャレンジする、問い糺すなどといったことが重要である。出生時に認められ、付与された性別になることをさしあたって前提にせずして教育は行えない。何になりたいかの決断を

²⁴ どうやら子供をまるで性別なしに育てる風潮があり、そのような教育も可能である国があるようである。着せる服だけではなく、使う代名詞を中立なものにしたり、新しい言葉を作って使ったりして、大きくなってから自分でジェンダーを決めることを目指しているが、果たして現実的であろうか。

何のロールモデルもなしに個人に任せるということは一見すれば自由のようであり、本当の自由ではない。大人になるまであたかも性別がないかのように、あるいは両方の性があるかのように子供を育てることは親として無責任とすら言える。すなわち、自分らしくなるためには何らかの模範や影響も大事である。それに沿えないことによって害を与えられることだけは絶対あってはいけないことである。ただ、本稿では従来の2つの性別の在り方が主な対象であったため、自分の性別を生物学的であろうと心理学的であろうと疑問視する人、それを苦痛に感じる人（トランスセクシュアル、トランスジェンダー）などに焦点を十分に当てることは不可能であった。

最後に、男女の脳の違いについての研究や、言語の発達障害や自閉症や同性愛が男性により多く見られるという研究結果は、生物・医学的に性別が定かでない人間、あるいは自分が違う性別であることを感じて、主張し、転換を求める人間についての考察にも有益である。中世においては同性愛者の定義として「反対の性の体に閉じ込められている人間」であると考えられていた。同性愛と性別は同じ次元の話ではないが、同性愛者に異性の特徴があるのはなぜか、脳が異性の脳に似ているのではないか、という点が興味深く研究者の注意を浴びている。とはいうものの、その場合、性別を疑うとか変えるべきだという結論にはならないことが重要である。それとは別に、現代では、生殖器が未発達の子供により相応しい（＝その人らしい）性別を認めるために、男女別のおもちゃの実験を使って、体だけでは分からない子供の心の性がある意味で確かめることができるかもしれない。つまり、なんとなく感覚的に自分で決めた傾向や気持ちではなく、医学的なデータで示されるものであれば、少なくともそれについて論じたりする土台ができるのである。ただし、普通に発達し健康的な人間が気持ちのために自分の体の性を疑ったりする場合、極めて慎重に進むほうが賢明であるに違いない。把握しにくい精神をなんとかして体に合わせ、葛藤を和らげるように努力するか、精神に合うべく肉体を変えるか、の選択に際して、後者のほうが遥かに問題点が多い。それに、完全に健康で、心と体が合致し、円滑に動いている人間はおそらく一人も存在しないので、この場合だけ無理やりに解消を求める必要があるだろうか。すべての欠点を直そうとしても

キリがない。どの人間も違う意味で壊れた器であり、それを直すのではなく、認め、幸せに生きる方法を探ることのほうがより重要に思える。キリスト教の倫理においては、体は根本的な次元であって、無視されるべきでないものである。本質からして、快樂の源である時もあれば、身体は苦しみの原因であることも多い。自分の性別を知るためには身体的な現実を受け止めなければならぬし、気持ちだけに基づいてそれを変えようと思っても、それは無理というだけでなく、危険なことであると言っても過言ではない。